

# 日英両語における社会的・ 文化的意味の比較研究

小 林 淑 哉

ある言語の一つの単語を、他の言語に置き換えることは、その単語がただ一つの意味しかもたない場合でも、厳密な意味でその訳語が等しく対応しているとはいえない。ましてその単語がいくつかの意味をもっている場合は尚更である<sup>註1</sup>。英和、和英辞典の編纂にあたって、訳語の選択に苦勞するのはそのためである。編纂者が訳語の選択に細心の注意を払っているにもかかわらず、辞典を利用する者は、単語の意味を、その訳語から、凡そ見当違いの判断をくだしてしまうことがある。それは、両語の社会的・文化的背景が違うことから生ずる場合が多い。本論は英語の単語とそれに対する日本語の訳語を比較し、訳語の中に誤解を与えるものがないか、誤解を与えるとすれば、それは何が原因か、その原因が日本と欧米の社会的・文化的背景の違いから生れてくるものとすれば両者はどのように違うかを分析しようとするものである。ただし、同じ英語でありながら、英国人と米国人とで解釈を異にする場合もある<sup>註2</sup>。いわんや欧米諸国の間で考えを異にする点は多い。本論では英語を通して、欧米に共通する最大公約数ともいえるような社会的・文化的背景を取り上げるつもりである。

## 1 Window-shopping と「ひやかし」

window-shopping を英和辞典で引くと、「ショーウィンドーを覗いて歩くこと」、「ショーウィンドーののぞき見（歩き）」というような訳語が見受けられる。体裁は悪いがこれらの訳以外には考えられない。ある辞典には「ひやかし」という訳語が付せられているが、これは大きな誤解を招くことになる。即ち欧米人は身のまわりの品、家財道具、プレゼントなどを買う場合に、合理的であり、節約を考える。すぐ壊れてしまうもの、すぐ駄目になってしまうものは嫌う。思いつきで物を買おうとはしない。機能的にすぐれたもの、ながもちするもの、個性豊かなものを探し求める。だから普段から店のショーウィンドーを見て歩く。そしてよいものを物色しておいて、金がかかったときに買いに行く。普段、赤ん坊を乳母車にのせてショーウィンドウを見

て歩く母親、散歩がてらショーウィンドウをのぞく夫婦、犬を散歩させながらショーウィンドウを見て歩く老人、そういう姿を沢山欧米では見かける。午後五時になれば一般の商店は閉まっても、ショーウィンドーだけはあかあかと照明が輝き、個性豊かな飾りつけが人の眼を楽しませる。日が暮れてもショーウィンドーを見て歩く人が多いからである。それが window-shopping なのである。ところが日本人は物を買うときには見栄の心理が働き、実質より見ばえのよいものを求め、旅先で親戚友人のために買うお土産も今日買って明日は紙屑籠に入ってしまうようなものが少くない。お歳暮、お中元の品を買うときには儀礼的になる。その上、いったんお店に入って、黙って独りで品定めをしたいのに、店員から「いらっしゃいませ。なににいたしましょうか」と声をかけられると、買わなくてはならない義理を感じる。さんざん色々な品を見せてもらった挙句に買わないで店を出ると悪いことでもしたかのように思う人さえる。店員の方も、「あの客は品物をひっくり返しておきながら買わないで帰った」と同僚に囁く。店員は囁かないとしても、客の方がきつと悪口をいわれているだろうと勘ぐることもある。そんな日本人の心理と風俗を秘めて生れた言葉が「ひやかし」である。window-shopping と「ひやかし」とは現象は同じでも、その両語のもつ深層文化には大きな隔りがある。深層文化に大きな隔りがある場合に、その対応語とすることは誤解が大きいと言わねばならない。

## 2 gambler と「やくざ」

gambler という単語の訳語については、多くの英和辞典で疑問を抱くので、その項を多くの辞典から引用してみよう。

研究社「英和大辞典」ばくち打ち (gamester); 相場師

研究社「現代英和辞典」ばくち打ち、相場師

研究社「新英和中辞典」ばくち打ち、やくざ; 相場師

三省堂「カレッジクラウン英和辞典」ばくち打ち、相場師

三省堂「新明解英和中辞典」賭博者

旺文社「英和中辞典」ばくち打ち; 相場師

講談社「ニューワールド英和辞典」賭博者、ばくち打ち

「ウェブスター英和辞典」多額にかけをする人

「小学館ランダムハウス英和大辞典」ばくち打ち、賭博師; 相場師

以上の訳語を整理すると、1. 相場師、2. 賭博師 (又は賭博者、かけをする人)、3. ばくち打ち、4. やくざ、以上四種類に分類できる。

欧米の gambling の哲学とは何か。木村尚三郎教授の言葉<sup>註3</sup>を次に引用しよう。

西欧世界における賭けは、狩猟、戦争とともに、もともと貴族・富裕階級の世界だけの、高雅な遊び、精神と肉体を鍛練するスポーツであり、同時に、狩猟・戦争と同じく肉体的・社会的生命のかかった真剣勝負であった。その精神は今日まで伝えられており、金をかせぐための賭け、獲物をとって食べるための狩猟は、軽蔑される。さらに賭け金を支払えぬような負け犬は、この真剣勝負の遊びにふける紳士間の合意を破る裏切り者として糾弾され、紳士としての人格と名誉を奪われ、その後の社会的生命を絶たれてしまう。

中 略

ガルブレイスの著書『不確実性の時代』に指摘されているように、賭けに際して大切なのは、いかに大きく勝つかということよりも、むしろいかに大きく負けられるかということである。つまり、着飾った紳士淑女が取り巻き、見つめるなかで、大きく負けても平然としていられることにより、金銭など掃いて捨てるほど持っていることを対外的にどれだけ誇示しうるかが、紳士、金持ちにとっての賭けの意味であり、効用である。

欧米人の賭け、ヨット、狩猟などはすべて経済的な無駄を覚悟の上で、あるいはこれを度外視してなされる、ゆとりある階層の遊びであり、しかも高度の精神的緊張を伴う真剣な遊びである。

以上のような gambling に対する精神は未だに欧米人の心の中に活きている。これ程ではないにしても、欧米では gambling そのものを不道德とか悪徳とは考えないから、うしろめたさや陰湿さはその言葉からは感じられない。従って、先に整理した四種類の訳語の中、1と2は日本語としてこなれていない、しかもニュアンスの乏しい言葉ではあっても、これら1と2の訳語にたよらざるを得ないのである。3と4から日本人が連想する gambler は、本来の gambler の意味から隔ってしまうことになる。日本人は「ばくち打ち」という言葉をきけば、瞬間的に、入れ墨とやくざを連想する。「入れ墨」ときけば、やくざとばくち打ちを、「やくざ」ときけば、ばくち打ちと入れ墨を直感する。日本語ではそれ程この三者は一体をなし、ある一つの固定観念を日本人は持っている（ただし、入れ墨と「ほりもの」とは区別すべきであって、「ほりもの」はやくざと関係はないといわれている）。しかし欧米では、やくざは入れ墨をしている場合もあるが、入れ墨をしている者は必ずしもやくざではない。私個人の経験では、私の尊敬する米国人で言語学の教授がいる。ある時私は彼が腕に入れ

墨をしていることに気がついた。私は日本人的発想から、この人が昔はやくざか不良であったに違いない、そしてその後改心して、このようなすばらしい学者になったのだらうと独り合点していた。しかしある時他の教授に、彼がなぜ入れ墨をしているのかをきいて、私の無知に気がついたのである。私の無知とは、自分の国の風俗習慣、社会的・文化的背景によって、他の国のすべてを律してしまうことの恐ろしさである。即ち、米国では若者が海軍に入隊したとき、多くの者が入れ墨をする風習があるというだけのことであった。欧米でもやくざは gambling をすることは間違いない。しかし、gambling をする者の殆んど多くの人々は「ばくち打ち」とか「やくざ」という言葉から日本人が連想するような人々ではない。従って gambler の訳語として「ばくち打ち」とか「やくざ」という日本語をあてるのは日本人を誤解に導くことになる。

言葉には原義と派生義（あるいは比喩的意味）とがある。これを研究することは、「言葉の意味」の通時的研究といえる。それに対して、過去はいざ知らず、その言葉が現在使われている意味の中で、その言葉の核となるべき意味と付随的な意味を分析することは、「言葉の意味」の共時的研究といえる。もしもある言葉が、核となるべき意味と付随的な意味を、併せ持つとするならば、その核となるべき意味は、社会的・文化的背景から生れた場合が多い。そしてある言語の一つの単語に対応する単語を他の言語から拾い出す場合の決め手は、その二つの単語が、核となるべき意味を共有しているかどうかという点にある。既に述べた gambler という単語に対する訳語を日本語から拾い出す場合、「賭博師（又は賭博者、賭けをする人）」は、核となるべき意味を共有すると考えるが、「ばくち打ち」、「やくざ」は共有しないと考える。

### 3 respect(v.) と「尊敬する」

この両語を分析する前に、日本人と欧米人の意識構造の違いを考えてみよう。欧米では子供、老人、女性に思いやりをもつが、一方では一個の人格として考える。大人は子供の言動を、子供なるが故に大目に見ることはせず、一人前の人間として取り扱う。それに反して日本では子供、老人、女性を差別し、その差別が、ある時には大目に見る結果となったり、あわれみをかける結果となる。そして子供の言動に対しては、子供なるが故に寛大であったり、笑って許したりする。子供を一人前の人間として扱わないが故に、幼児語が多い。女性を差別するが故に男尊女卑の意識が男性の心の底にはまだ残っていて、「女だから学問より幸福を求めよ」とか「女の癖に……」という言葉が往行する。

次に、子供、老人、女性以外の、対等の社会人同士ではどうか。欧米では専門的技能の能力差をはっきり認める徹底した能力主義であるが<sup>註4</sup>、一方私人としては、その人の社会的地位の高下により、職種の別により、学歴の有無により、年齢により、優越感をもったり、劣等感をもったりはしない。それに反して、日本では、兄は弟に優越感をもち<sup>註5</sup>、有名な大企業の社員は、その職種がなんであれ、弱小企業の社員に対して優越感をもち<sup>註6</sup>、その大企業の名を刷り込んだ名刺を持ち歩いて得々となるという社会現象も生れてくる。あるいは、同じ会社内であれば、会社内での地位・序列が常に日本人の意識から離れない<sup>註7</sup>。

以上のような社会的背景の中で、欧米には *respect* という動詞があり、日本では「尊敬する」という言葉がある。私の友人で、パリで生活している者がいる。彼は日本人であるがパリで生れ、十三歳のときに日本へ帰国し、二十三歳の頃又パリに行き、それ以来約三十年間パリで暮している。彼は日本語とフランス語を活かした職業に従事している者だが、つくづく述懐していることは、どうも英語やフランス語の *respect* は日本語の「尊敬する」という単語のニュアンスと違うのではないかということである。日本人はレストランのウェイトレスなどに対しては、ぞんざいな口をきくか、そうでないとしても心の中で、そういう職業の人に軽蔑の気持ちを抱く。しかし欧米では、そういう人たちに対しても *respect* する気持ちを抱いている。けれど、そういう人たちに対して日本語の「尊敬する」という言葉はあてはまらないのではないか。以上が私の友人の意見である。*respect* と「尊敬する」という両語は等しく対応する部分はあるが、両語の核となるべき意味は喰い違いを感じることがある。

#### 4 その他の問題点

私の調べた限りでは、*kindness* の訳語として、どんな英和辞典にも「恩」という言葉は見あたらないが、「恩」の訳語を見ると、どんな和英辞典にも *kindness* という言葉が掲載されている。

英語の *sociability* は日本語の「つきあい」と同一視されがちであるが、本質的に全く異質なものであると考えられる。どの英和辞典を見ても、*sociability* に対する訳語として「社交性」という言葉は出ているが、「つきあい」という言葉は出していない。

その他、「義理」、「人情」、「仁義」、「世間体」など日本独特の意識構造は、彼我の社会的・文化的背景を分析しつつ、比較研究されなければならない。

註 1 国広哲弥著「構造的意味論」

鈴木孝夫著「ことばと文化」

註 2 例えば“A rolling stone gathers no moss.”という諺は、英国では「職を転々と変えていると、仕事を成就することはできない」という意味に解釈するのにひきかえ、米国では主に「われわれは常に活動的に動いていないと人間はなまってしまうものだ」と解釈する。このことについては、三省堂発行「日英のことばと文化」という論集の中で、小笠原林樹氏が「日米の文化とことば序論」という論文の中で取りあげ、更に鈴木孝夫氏が「ことばと文化」(岩波新書)でも述べている。

註 3 木村尚三郎著「和魂和才のすすめ」(日本経済新聞社発行)

註 4 中根千枝著「タテ社会の人間関係」(講談社発行)で次のように述べている。

資格の差を抑圧し、枠を強調する結果、このような現象を呈するのであるが、こうした日本的イデオロギーの底にあるものは、極端な、ある意味では素朴(プリミティブ)ともいえるような、人間平等主義(無差別悪平等ともいうものに通ずる、理性的立場からというよりは、感情的に要求されるもの)である。これは西欧の伝統的な民主主義とは質的に異なるものであるが、日本人の好む民主主義とは、この人間平等主義に根ざしている。

これは、すでに指摘した「能力差」を認めようとししない性向に密接に関係している。日本人は、たとえ、貧乏人でも、成功しない者でも、教育のない者でも(同等の能力をもっているということを前提としているから)、そうでない者と同等に扱われる権利があると信じこんでいる。そういう悪い状態にある者は、たまたま運が悪くて、恵まれなかったもので、そうあるのであって、決して、自分の能力がないゆえではないと自他ともに認めなければいけないことになっている。

註 5 研究社発行「講座・比較文化」の第八巻「比較文化への展望」の中で、鈴木孝夫氏も述べていることだが、日本語には brother を表す言葉はなく、「兄」、「弟」という言葉がある。すなわち、欧米では年令があまり問題にはならないのであって、どうしても必要となしにだけ、elder brother 又は younger brother という言葉を使う。それに対して日本は年令が問題であるが故に、「兄」とか「弟」という言葉があり、弟はいつも兄に頭があがらないという社会現象を多く見かけることになる。

註 6 中根千枝著「タテ社会の人間関係」の一節を引用しよう。

日本人が外に向かって(他人に対して)自分を社会的に位置づける場合、好んでするのは、資格よりも場を優先することである。記者であるとか、エンジニアであるということよりも、まず、A社、S社の者ということである。また他人がより知りたいことも、A社、S社ということがまず第一であり、それから記者であるか、印刷工であるか、またエンジニアであるか、事務員であるか、ということである。

実際、××テレビの者です、というので、プロデューサーか、カメラマンであると思っていれば、運転手だったりしたなどということがある。

註 7 会社に限らず、官庁・文芸・学者の世界でも同じことが言える。中根千枝著「タテ社会の人間関係」から、いくつかを引用しよう。

同じ実力と資格を有する旋盤工であっても、年齢・入社年次・勤続期間の長短などによって差が生じ、同じ大学の教授であっても、発令の年月日によって序列ができ、また、かつての軍隊では、同じ将校といえども位官の違いによる差別は、驚くほど大きく、さらに同じ少尉であっても任官の順によって明確な序列ができていたという。同じ

外交官といえども、例えば一等書記官と二等書記官の差は素人では想像できないほど大きく、さらに同期（外交官試験合格年次）であるとか、先輩・後輩の序列がある。

× × ×

俳優のような職業に従事する人々のなかにまで、序列意識が根強くあることである。例えば、ある文学賞を授与されたある作家の言として、「受賞はうれしいが、先輩をさしおいて私のごときものが受賞するのは……である。」という文句があったり……

× × ×

かつて私がロンドン大学で客員講師をしていた頃のことである。社会人類学の同僚とお茶を飲みながら談笑していたとき、ちょうどアメリカの大学の出張講義から帰ったばかりの教授が「そういえば、チェ、君を知っているという××教授（日本人）に会ったよ。」と私にいつておいて、一同を見まわし、「それがとてもおもしろかったんだ。僕は彼が民族学者だというので、ミス・ナカネとお知り合いですか、ときいたんだ。彼氏曰く『よく知っています。』、ところがその後でいうことがふるってるんだ。そこでちょっと間をおいて、彼はいかにもいたずらそうにオチを次のようにつけたのである。『しかし、彼女は私の後輩なんです！』と」。その時、話し手も聞き手も一度にどっと笑ったのである。

その教授は自分の話の効果をいっそう確認するために、「全く、僕はステータス・ソサエティの人間というものをこの目でまざまざと見たってたわけなんだ。いかにも日本人じゃないか。」と、つけ加えたのである。

× × ×

インドで私が最も驚いたことは、中国同様に敬老精神が強く、またカーストなどという驚くべき身分差があるにもかかわらず、若い人々や、身分の低い人々が、年長者や、上の身分の人々に対して、目に見える行動においては、はっきりした序列をみせるが（決してタバコをすわないとか、着席しないとかいうように）、一方、堂々と反論できるということである。

日本では、これは口答えとして慎まなければならないし、序列を乱すものとして排斥される。日本では、表面的な行動ばかりでなく、思考・意見の発表までもにも序列意識が強く支配しているのである。

（こばやし よしや 本学助教授 英語）